2010 年 5 月 23 日（9 月 6 日追記）
福永武彦研究会　第 123 回例会資料
木澤隆雄

「海市」関連資料の検討

長編「海市」読解の上で参考になると考えられる資料（福永自身の資料を含め約 60 点）を抽出し、そのデータを一覧としてまとめた（4/12～12/12ｐ）。抽出資料として、「海市」には直接の言及がない文献についても、本稿作成者の判断で加えている。

なお、一覧表中の要旨は本稿作成者の主観によるものであり、文献の著者自身が意図したところを反映しているかどうかは不明である。また、資料からの引用に当たっては、文体の変更、文章の省略等の一部改変を行っている場合がある。

１．資料の総括

１）全体の傾向

①批判的評価

本作品に対する批判的な評価は、本筋の渋と安見子の愛が、通俗恋愛小説の域を超えていない点に集約できるようだ（資料 3-2、4-8）。福永は、刊行の 9 ヶ月後に新聞紙上に発表した「『海市』の背景」（資料 1-3）の中で、「文学的主題を追い求めることよりも、この小説では謂わば音楽的主題といったもの、人間の魂の中の和絃のようなものを追って、小説の全体が読者の魂の中で共鳴音を発しさえすればいいと考えたから、そういうことの分ってもらえない批評家には、どうも評判が悪かったようである」と述べている。しかし、福永の意図した音楽的主題が作品の中で充分に効果をあげていないという指摘もある（資料 5-4、5-12）。

②小説の特徴として複数挙げられている点

・渋と安見子の愛と死（1-1、1-3 他多数）
・音楽性への志向を含めた巧緻な作品の構成（1-1、1-3、1-6、3-6、3-12、3-14、3-16、3-17、4-6、4-8、4-11、5-4、5-11、5-12、5-14、5-15、5-17）
・暗黒意識を含めた死の意識（2-1、2-5、3-13）
・芸術家小説（3-1、4-5）
・海との関連（4-10、4-12、5-15）
・戦争体験、死にそこなった者としての意識（3-7、4-11、5-16）

２）小説の構成

〝バッハの「平均率クラヴィア曲集」に倣い、男と女との愛の「平均率」を、「前奏曲」と「フーガ」とを交錯させる形式によって描き出そうと考えた〟という「海市」の函に書かれた福永の言葉（1-1）より、「海市」の小説構造を、平均率曲集（正しくは〝平均律〟）と対比させ、分析した資料として 5-11 がある。

また、福永自身が「『海市』の背景」（1-3）において、多くの断章により構成された本作品の構造について述べており、これを詳細に分析した資料として 3-6 があり、その他、断章構造に着目した資料として 3-17、4-11、5-14、5-15、5-17 などがある。「海市」全体を渋一人の語りとして解釈可能との論考がある（5-14、5-17）。

こうした多義的な解釈を許容する「海市」を福永の実験小説（ヌーヴォーロマン）の試みとして検討した資料（5-17）や、手法が映画のモンタージュに近いとの指摘がある（4-6、4-11）。

３）渋と安見子の愛

著者自身「一人の画家を主人公に、恋愛の幾つかの相を描いて、現代における愛の運命を追求した」（資料 1-1）と執筆意図を明らかにしているが、多くの資料が渋と安見子を中心とした恋愛をその主テーマとしている。二人の関係について主な見解を以下に示す。

①福永自身の言葉：「『海市』の背景」より（1-3）

〝男にとっての芸術との三角関係、女にとっては自由、もしくは自由であることの夢との三角関係という構図を描いた。そして二人の間には、それぞれの過去が

亡霊のように漂うことにした。男と女との現在が、一種の人工的な甘美さを持つように書こうと思ったが、それは同時に腐臭のような魂の死とも無関係ではない。〃

②資料の主な見解

ａ.「渋－安見子－芸術」の三角関係として捉えた見解

・愛を求める安見子と、芸術に生きる渋との間に差異が生ずる（資料 2-5、4-10)。
・渋にとって安見子は、自分を「衰弱」から回復させ、芸術と人生とに「生の息吹」を吹き込んでくれる人物であり、それ以上でもそれ以下でもない（2-6、5-10、5-13)。
・ここでは男は芸術家という特別な存在であり、人間の女性がアポロンやエロスのような神を愛して死ぬという話と同工異曲かもしれない（2-7)。
・福永の人物たちは、プラトンにならって、超越のひとつの可能性を恋愛に託している（もうひとつの可能性は芸術作品の創造行為)。愛するということはこの世界を超えようとする一つの意志であり、そのとき恋人は究極の美（あるいは、ある永遠なもの）に至るためのきざはしでしかない（3-9)。
・福永の作品には反復して、「男－女－芸術」という＜愛の三角形＞が主題化されていると指摘したのは清水徹だったが、これはもっと一般的に、「私－他者－観念」の三項図式とも理解することができる（3-16)。

ｂ.渋、安見子を死（暗黒意識）に捉われた人間像とする見解

・安見子はその出会いの時から、渋との愛の向うに死を予感していた（2-2)。
・愛と死への耽溺ではなく、その機会を逸した者の愛惜と痛苦がライトモチーフになっている。福永は現代の愛を「死を孕んだデカダンス」として甘美に定着した（3-12)。
・泉鏡花が書いた夢幻的な女を思わせる安見子は死の化身ではなかったか（3-16)。
・「海市」、「死の島」のヒロインたちは、生においても死においても男たちよりも果敢であり、そのことによっていっそう哀切である（4-12)。
・渋にしろ弓子にしろ、安見子にしろ、みんな死に取り憑かれている（4-13)。
・安見子は死すべき「運命の曲線」を背負わざるを得ない一典型であり、そして生き残る存在となり日常に回帰する渋は、安見子の「死すべき運命」の何であるかを知りえない人間である（5-2)。
・渋が安見子との関わりの中で、次第に罪の意識を感得し、暗黒意識におちいる過程が描かれている。その罪の意識は、彼が約束を破って一緒に死ぬことができなかった恋人への罪に端を発し、最後に安見子との約束の場所に行けなかったことへの罪へと帰結していく（5-5)。
・渋と安見子は生に対する虚無感と愛に対する不安という点で一致している。安見子が渋に惹かれたのも、渋の絵に自分と共通する「破壊的なもの、不吉なもの、人を闇の方へ振り返らせる奇妙な呼び掛け」を感じたからである。福永の言う「頽廃と絶望」は安見子にこそ表されている（5-8)。

ｃ.愛の不可能性とする見解

・恋愛小説の形を借りた、恋愛不可能小説（4-6）
・安見子の「あたしたちは別々に愛していたんです」が、現代人の悲劇として用意した作者の回答だろう（4-7)。
・福永が執拗に愛欲場面を描くのは、愛の肉体的な結びつきが深まれば深まるほど、それが不可能であることを露呈させる為である。(4-9)。
・他者への愛よりも常に増大した自己をめぐる観念を持つ者の「愛の不可能性」が巧みに描かれていると思われる（5-1)。
・渋は、その極限において自己の限界を知り、他者を切り捨て、自己の内部へと帰巣していかざるを得ない（5-6)。
・渋はいつでも自分の愛を女に押しつけている。ふさには信念としての愛を、弓子には救済としての愛を、そして安見子に対しても、渋の愛し方が一方的なことに変わりはない（5-8)。

ｄ.その他の見解

・痛切な魂の希求、宗教的な深みにまでひびく愛の運命の物語（3-7）

４）芸術家小説
・人間と芸術家という倫理的問題を検証しようとしている（3-1)。
・反ロマネスクな性格をもった芸術家小説として読む必要がある（4-5)。

５）海との関連
・福永自身、随筆「海の想い」の中で、″先ごろ「海市」という小説を書いたが、そこでは二人の男女のそれぞれが持つ海のイメージがまるで違ったものであり、そして二人の間にもまた海があることを示したいと思った。″と書いている（1-6-2)。
・＜海＞の彼方にふたりが見たかもしれぬ蜃気楼＝「海市｝＝「妣の国」も、その姿を異にしている。最後に安見子は「妣の国」を遠望したかもしれぬ伊豆の海に身を投じる（4-10、5-16)。
・「海」にも反復の契機を見てとることができる。ポーの詩「海の都市」、「死都ブリュージュ」、「廃市」の反映（4-12)。

６）戦争体験、死にそこなった者としての意識
・戦争の悲惨さを、かくばかり甘美で輝きに満ちた光景の中で捉え得た作品は稀であろう（3-7)。
・渋の卑怯者の意識は、また戦争によって死んだ者への罪の意識に照応していく（4-11)。
・福永の戦争体験は、同世代の人々に対する贖罪意識に結びついている面が多分にあるのではないか（5-16)。

７）他作家による作品の反映
グレート・ギャツビー／フィッツジェラルド（2-5)、菜穂子／堀辰雄（5-2)、海辺の墓地／ヴァレリー（5-13)、嫉妬／ロブ・グリエ（5-17）などがある。

８）その他の見解
①渋と安見子との愛が、福永の個人的経験に基づいているのではないか（2-3)。読者からの安見子の″靴下止め″についての指摘に対する福永の反応もこれを裏付けているのではないかとも受け取れる（2-4、3-8)。
②3人の彼女（安見子、弓子、ふさ）の相互浸透、一種の同一性は名においても現れている。YASUMIKOの中にはYUMIKOが含まれ、残るAとSはFUSAの一部分を成している（4-12)。
③清水徹氏は「忘却の河」以降の後期の作品では「妣の国」の観念を導入することによって、「人間は死んでも帰っていく場所があるのではないか」という考えに重点を置いて小説を書くようになったのではないかと述べ、安見子が南の海（伊豆）を目の前に死ぬ設定にしたというところに、ある種の啓示が見えるようだとしている（5-16)。
④福永は「海市」執筆当時、ブラームスに凝っていた（1-9)。「海市」にも渋と安見子がコンサートでブラームスとモーツァルトのクラリネット五重奏曲を聴く場面がある。また、「『海市』の背景」でも小説全体の形式がブラームスの弦楽六重重奏曲第1番のようになっていると述べている（1-3)。
⑤渋と安見子がコンサートで聴くモーツァルトのクラリネット五重奏曲に対する渋の言葉「それは死に隣り合って、冥府から吹いてくる風に身を任せている感じだった」がそのまま簡潔に「海市」にあてはまるとした遠藤周作の評がある（4-4)。
⑥渋の2度の裏切りについて考察を加えた資料（14-2)。
⑦安見子に天女のイメージを重ね合わせた論考（5-14)、及びこの論考に検討を加えた資料（5-17)。

２．資料一覧：4/12～12/12ｐに示す。
以下を基準に分類を行った。
１）福永自身の言及
２）単行本
３）文芸誌
４）新聞、文庫/全集 解説他
５）大学研究紀要、その他研究録

2．「海市」(1968) 参考資料一覧　　2010/05/23作成、09/06追加

＊要旨は資料作成者の主観によるものであり、著者が意図したところを反映しているかどうかは不明です。
また、要旨は基本的に資料からの引用によっていますが、引用に当たっては、文体の変更、文章の省略等の一部改変を行っている場合があります。

1) 福永自身による言及

No.	タイトル	著者	書名 (出版社)	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
0	「海市」初出と書誌	ー	福永武彦全集　第8巻　附録 (新潮社)	1987/12	1p	(初出) 書き下ろし (単行) 1.「海市」初版。1968年1月新潮社刊。「純文学書き下し特別作品」の1巻。四六判、クロース装、カバーつき、函入。函に「著者の言葉」及び推薦文 (川端康成・伊藤整・平野謙) を刷込み。装丁岡鹿之助。本文402頁。内容ー「海市」1篇。 2.「海市」特装版。1968年1月新潮社刊。四六判、総皮装。装丁者名なし。限定4部、番号なし。非売。内容は1に同じ。 3.「海市」新潮文庫版。1981年10月刊。カバー装画ニコラ・ド・スタール。本文420頁。内容ー「海市」1篇、及び「解説」(豊崎光一)。
1	著者の言葉	福永武彦	「海市」単行本　函書き (新潮社) 福永武彦全集　第8巻に収録	1968/1	1p	(全文引用) 一人の画家を主人公に、恋愛の幾つかの相を描いて、現代における愛の運命を追求した。バッハの「平均率クラヴィア曲集」に倣い、男と女との愛の「平均率」を、「前奏曲」と「フーガ」とを交錯させる形式によって描き出そうと考えた。頽廃と絶望の時代に、愛とても例外というわけにはいかない。にも拘らず、愛は我々の心の底に、常にクラヴィアの如く鳴り響いている筈である。 昭和42年10月
2	「海市」序	福永武彦	福永武彦全小説第8巻 (新潮社) 福永武彦全集　第8巻に収録	1974/1	3p (再録時)	1962年頃から相当の部分を書き始めた。1964年4月に単身、南伊豆の妻良(めら)、子浦、落居などに滞在。当初のプランは伊豆の漁村を舞台にして二人の男と一人の女との悲劇的愛を描くつもりだった。題名は蘇軾の詩「海市」を踏襲することにし、「廃市」と対になるので面白いと思っていた。 1965年4月からシノプシスを全く改めて書き始め、暮までに380枚位書いた。翌1966年は「死の島」、「風のかたみ」の連載を開始し、入院もあり「海市」は20枚くらいしか進まなかった。翌1967年8月1日から9月10日までに、いよいよ切羽詰まったところで300枚ほど書き、最終的に700枚ほどで完成させた。短い間にこんなにたくさん書いたのは初めて。 せっせと取ったノートの中に「ゴッホとゴーギャンに関する補足的主題」というのがあった。自殺者であるゴッホと、自殺から生き残ったゴーギャンとについて論じていて、その辺に「風土」の名残が見られるかもしれない。
3	「海市」の背景	福永武彦	東京新聞　1968/10/16朝刊 福永武彦全集　第8巻に収録	1968/10	2p (再録時)	一人の男と一人の女が対話を交わしている形の後期短篇の形式を長篇に用いたらどうなるかを考えた。ひとつの断章が彼と彼女とからなる、そのような断章がたくさんあるとすれば、さまざまの人間関係がそこに描き出され、断章がお互いに響き合うような効果を出せるだろう。彼と彼女とは必ずしも常に同じ人物ではなく、時間的にも時の流れに従うとは限らない。そして読者は、これらの断章の積み重ねの上に、普遍的な人生のすがたを垣間見ることになろう。 長篇小説としての本筋は最初から恋愛小説ときめてあった。ジイドの「狭き門」、グレアム・グリーンの「情事の終り」、どちらも成功しているが、それは作品の中でキリスト教が重要な役割を果したからである。神との三角関係が劇的緊張を促す。それらの真似をすることもできず、しかたなしに男にとっての芸術との三角関係、女にとっては自由、もしくは自由であることの夢との三角関係という構図を描いた。そして二人の間には、それぞれの過去が亡霊のように漂うことにした。男と女との現在が、一種の人工的な甘美さを持つように書こうと思ったが、それは同時に腐臭のような魂の死とも無関係ではない。 全体を3部に分け、間に「間奏曲」という短い章を挟んだから、ブラームスの「弦楽六重奏曲」第1番のように、短い第三楽章を持つ4楽章のような形式になった。本筋の方が進んで行く間に、フーガのように彼と彼女とからなる断章がはいって来る。断章の方は、本来はもっと抽象的な、従って彼と彼女とが誰だかよく分らないようなものにするつもりでいたが、結局は妥協してわかりやすいものにしてしまった。 文学的主題を追い求めることよりも、この小説では謂わば音楽的主題といったもの、人間の魂の中の和絃のようなものを追って、小説の全体が読者の魂の中で共鳴音を発しさえすればいいと考えたから、そういうことの分ってもらえない批評家には、どうも評判が悪かったようである。
4	「海市」エピグラム	「登州の蜃気楼」より /蘇軾 (そしょく) 1036ー1101	「海市」単行本 (新潮社) 福永武彦全集　第8巻に収録	1968/1	1p	「海市」 海上蜃気。　時結楼臺。　名海市。 登州の蜃気楼 東方雲海空復空　東方にひろがる雲と海　すべては空(くう)のまた空 群仙出没空明中　そのおぼろな明りのうちに　仙人たちが出没するという 蕩搖浮世生萬象　だがこの世ははかなく漂いつつ万象を生ずるもの 荳有貝闕藏珠宮　貝の宮門の奥に真珠の御殿など　あるはずもない 心知所見皆幻影　目に見えるものはみな幻影と　わかってはいるものの わが耳目の楽しみのため　神の手を煩わそうと考えた (以下略) 訳：前野直彬　「中国古典文学全集19　宋・元・明・清詩集」(1973) より
5	原音楽的なものについて	福永武彦	ボオドレエルの世界 (矢代書店)	1947/10		ボードレールは、外界の物たちを内部世界において詩に定着するため外界から取り入れて来る時、「匂」も「色」も「お前の眼」も「秋の空」も「花々」も、すべて音楽に、或は原音楽的なもの (もしこのような言葉があるとして) に、還元した。(中略) 詩人はすべて黙した物の語る声を聴き得なければならない。しかしボードレール以前に於いて、意識してこの声に耳を傾けた者はなかった。(中略) 音楽を詩の第一要素とした点にボードレールの独創があると僕は考える。この音楽とは勿論、藝術としての音楽ではない。その母体となる諧調である。それならば、藝術としての音楽に、ボードレールはどのような特質を与えていたか。 「私はしばしば聞いた、音楽は言語や絵画のように、何等かのものを正確に翻訳し得るという誇りを持ち得ないと。それはある点まで真実だが完全に真実なのではない。音楽は音楽なりに、また音楽に固有の方法によって、翻訳する。音楽の中には、絵画や、また言語 (何といっても、これは藝術の中で一番実証的だが) に於けると同じく、常に聴衆の想像によって完全に埋められる空隙がある」。 このような「想像によって完全に埋められる空隙」が、ボードレールが音楽に与えた最大の特質であり、それはまた象徴詩が (一般に詩が、と言うことができる) 最も重要な眼目とすべき点だった。ボードレールが、すべて物たちに与え、また内部世界に物たちを取り入れる条件とした音楽、或は原音楽的なものとは、この謂に他ならなかった。

No.	タイトル	著者	書名（出版社）	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
6	内的独白と時間構造	福永武彦・丸谷才一 対談	全集　現代文学の発見　月報6 「小説の愉しみ」（1981）に再録	1968/5	8p （再録時）	（「海市」について） 福永：大変単純なストーリーですから、それをいかにしてふくらませるか、そのためには当然過去が入ってくる。従って現在の部分には過去を入れない。その代り、挿話をなしている三人称の部分は誰にでも適応できるものとして描く、それだけのことです。 挿話の構造はいつもＡＢＡＢという風に並べてあるのです。Ａが画家とその妻の方で、Ｂが恋人の方。本当はＡとＢをバラしてデタラメに出したかったんですけど・・・・・。が、実際にはそうもいかないからわかり易くしましたけど。
6-2	海の想い	福永武彦	「おとなの絵本」8号（1968年8月） 「遠くのこだま」（1970）に再録	1968/8	3p （再録時）	先ごろ「海市」という小説を書いたが、そこでは二人の男女のそれぞれが持つ海のイメージがまるで違ったものであり、そして二人の間にもまた海があることを示したいと思った。彼等はその海を決して渡ることが出来ない。なぜならこの海は架空であり、また不可知であり、記憶をそ先ごろ「海市」という小説を書いたが、そこでは二人の男女のそれぞれが持つ海のイメージがまるで違ったものであり、そして二人の間にもまた海があることを示したいと思った。彼等はその海を決して渡ることが出来ない。なぜならこの海は架空であり、また不可知であり、記憶をその底に沈めたまま、彼等の運命を先天的に決定しているからである。そして彼等は、彼等が魂の中に持っている海が如何に恐ろしいかを、決して理解することが出来ないのである。の底に沈めたまま、彼等の運命を先天的に決定しているからである。そして彼等は、彼等が魂の中に持っている海が如何に恐ろしいかを、決して理解することが出来ないのである。
7	私の内なる音楽	福永武彦	芸術新潮　1969/1-3、5-9 福永武彦全集　第19巻に収録	1969/1	51p （再録時）	・私は、人間の心のなかには常にその人の固有の、何かしらの音楽が流れていて、それが記憶のなかにある既製の（というのはすでに誰かが作曲した）音楽と似ている場合に、その断片がふと甦るのではないかと思う。或いは私たちはみな、五線譜に音符を書きつけることのない作曲家で、いつでも形のない楽想が奥深いところに流れているのではないかと思う。そして自覚すると否とにかかわらず、生きるということは心のなかにそのような音楽を保ち続けることだというふうに。 ・あらゆる芸術形式のなかで音楽にまさるものを私は知らない。とすれば私はせめて内部の音楽を言語に翻訳することで、文学を自分の仕事として選んだと言えるかもしれない。
8	小説の発想と定着	福永武彦・菅野昭正 対談	国文学　1972/11 「小説の愉しみ」（1981）に再録	1972/11	39p （再録時）	菅野：相馬鼎が「海市」の画家に成長してゆくというか、発展してゆくというか、そういうつながり方も福永さんの作品全体を並べてみた場合、ある程度つけられるかもしれませんね。 福永：でも、「海市」の主人公には相当、作者自身が身を入れていますしね、「忘却の河」もそうですけれども、相馬鼎君にはあまり、作者は身を入れてなのです。 福永：ぼくは詩人を書きたいのです。つまり、自分のなかの詩的なものを使って主人公を詩人にしたい。ところが、詩人というのはどうもつかみようがなくて、小説の主人公とするにはたいへんむずかしいですね。 それからまた、小説家とちかいから、作者の分身だとすぐに見分けられてしまう。かといって、これが音楽家、あるいは日本画家、彫刻家、すべて、西洋画をかく画家以外の芸術家については、ぼくはよく知らないんですよ。 そこで詩人を書く、あるいは「詩人」的な魂をもっている人間を書くためには、やっぱり西洋画の画家がいちばん楽なのですね。
9	文学と遊びと	福永武彦・清水徹 対談	解釈と鑑賞　1977/7 「小説の愉しみ」（1981）に再録	1977/7	52p （再録時）	福永：今気に入っている絵描きがいてその画集をせっせと勉強する、あるいはモーツァルトに凝って端から聴いている、するとその視たり聴いたりしているものから自分の小説、新しい作品の雰囲気というのが出てくるというんじゃないでしょうか。 清水：これまでの作品のうち、何に凝ってたときに何が生まれたというようなものがありますか。 福永：「海市」のときはブラームスに凝ってましたね、でブラームスはあれからちっとも聴かなくなっちゃったけど、あの頃はせっせとブラームスをね・・・・・・、あとから「恋愛音楽」なんていう随筆を書いたりしましたからね。
10	見る型と見ない型	福永武彦	文学界　1968/11 「枕頭の書」（1971）に再録	1968/11	5p （再録時）	音楽というのは見ることの出来ないもの、つまり空気である。それは時間の中を流れて行き一つの印象を残すにすぎない。何度繰り返して同じ曲を聴いたところで、その印象が強められこそすれ、音楽の全体が頭の中にはいり切るということはない。そして芸術として完成している音楽の他に、あらゆる現象は隠された音楽を持つと、或いは我々の見る現実からは眼に見えない匂が発散していると、考えることも出来るだろう。私はそうした音楽、そうした匂を、インデックスのように頭の中に保存しておきさえすれば、それで足りるような気がする。その索引を検することによって、私は「無意識」に援軍を求め、そこから私の現実をつくり出して行く。見たものを忘れるということは、つまりは無意識にそれらを引き渡すということではないだろうか。

2）単行本

No.	タイトル	著者	書名（出版社）	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	純粋と豊穣ー「死の島」	菅野昭正	小説の現在 （中央公論社）	1974/7	1p 海市関連	なにがこうも執拗に福永を死との対話に駆りたてるのか。福永はなぜ死の意識の受けとめかたへの答えとしての小説を書かなければならないのか。人間の内面の純粋な極点と死の意識とが結びついた思想はどこから胎生してきたのか。 「海市」の主人公である画家は友人との会話の中で、同世代の多数の死者の犠牲で生き残ることができたという述懐をしているが、この部分に生き残った戦争世代に属する福永氏自身の思いの破片が読み取れるといっても、あながち牽強付会の言を弄することにはなるまい。戦争が福永の内部に残していった体験の核が、おそらく微妙な小説的変奏を加えられて、そこに表現されている。そして戦時下の日常で身近に感じたはずの死の恐怖、それ以前から揺曳していたかもしれぬ死の想念も加算したこの体験の核が、死との対話の源泉をかたちづくるのである。
2	福永武彦　「海市」の安見子	尾形明子	現代文学の女たち （ドメス出版）	1988/10	3p	安見子には命がけの恋が仕事をふくらませていくことが理解できない。命がけの恋なら他の一切は無になってしまうはずだと思う。そして、子供のような無邪気さと、少しはすっぱな自由さ、貞淑と小悪魔とが同居したような多様さを持ちながらも、安見子はその出会いの時から、渋との愛の向うに死を予感していた。宿命的な愛に身をまかせた以上、死しかないと一直線に思う。 安見子と渋に女と男の愛の相違を見るのは容易だが、今、こんなにも純粋に愛を受け止めることのできる女性がいるのだろうかと安見子に心惹かれながらも思う。女もまた土壇場で恋人を裏切るに違いない自分を心のどこかで知っているのではないだろうか。
3	ハイ・カラーの若様	小島千加子	作家の風景 （毎日新聞社）	1990/6	8p	「海市」が、福永作品としては珍しく現実の事件を踏まえた小説と知ったのは、先生歿後のことだった。現実の事件の方がより複雑で、運命の戯れの要素が濃いが、作品化する上の変容の工夫を思うより、先生にもそれほど元気な時期があったのかと驚きの方が強かった。
4	愛と無限世界　福永武彦 海市	藤田昌司	作家に聞いたちょっといい話 （素朴社）	1990/11	3p	「小説はたんに作者が読者に与えるものではなく、読者も精神的に参加していくもの、というのが僕の持論なんです」と福永は言った。 当時"靴下留め"（全集p66）はなく、おかしいのではと指摘した筆者に対し福永は「いやあ、女性の編集者もそこを問題にしたんだが、僕はどうしてもあの靴下留めの跡がほしかったんだ。想像で書くのは難しいもんだねえ」と苦笑したが、筆者はこの場面は作家の想像の産物ではないとニラんだ。
5	海市・福永武彦	菊島大	名作再訪（東京新聞文化部編） （河出書房新社）	1991/6	6p	作品では地名は左浦と友江とされているが、地図上ではそれぞれ妻良、子浦に相当する。子浦は下田からバスで1時間ほどの漁村。福永が子浦を訪れたのは1956年4月で、舟宿に1週間投宿した。1969年2月には貞子夫人と子浦を再訪している。 安見子との抱擁の最中、渋が彼女の恍惚の表情から感得する「死を孕んだ生」は「海市」の精髄であり、福永文学の主題でもある。 「海市」は後半その命題を「美と死」から「芸術」へと転調させる。渋は安見子と芸術との三角関係の一角に配置される。ここに愛を求める安見子と、芸術に生きる渋との間に差異が生ずる。瞬時の美の中に生としての死を、蜃気楼を希求する渋にとって、愛は、愛している意識の量が、愛してくれる意識の量を常に上回っていることが不可欠だ。 渋にとって安見子は幻の女、蜃気楼であったからこそ、愛する意識の量が上回ったに違いない。 本資料ではフィッツジェラルドの「グレート・ギャツビー」との対比がされている。
6	電話 「昭和文学60場面集5」より	福田陸太郎 ・森常治　編	昭和文学60場面集5　小道具篇	1991/9	8p 言及個所	電話は同時性のメディアである。同時性という概念がわれわれの現実世界には属さない概念、一種のフィクションであることから、そのような知覚の同時性が知覚され得ない死の瞬間と等価であるとすれば、我々は電話によって知覚され得ない死の瞬間の知覚というフィクションを、日常的に使用しているといって過言ではない。 多くの現代小説が電話と言う道具を小説の中に用いるとき、それがしばしば死との関係においてであるとの例として、「海市」における渋と安見子の電話での会話の場面を論じている。 「海市」作品全体については以下の様に論じている。 ・渋は画家としての創作活動の衰弱からの恢復をはかるために、安見子との恋を「利用」したという見方も成り立つ。渋のｴｺﾞｲｽﾞﾑが明瞭に見えてくるように、作品が構成されている。安見子は彼のｴｺﾞｲｽﾞﾑの犠牲者である、という読み方が可能。 ・安見子はキャンバスの上に彼女の生身の生を「写す（移す）」。ある意味では、彼女の生を殺すということに等しい（ポーの「楕円の肖像」への言及）。 ・犠牲としての安見子の死を伝達する媒体となって最大限の機能を発揮するのが電話である。電話で話し合う二人が互いに求め合いながら、相互に相互の上に蜃気楼を見ているという愛のかたちが、小説の終りにきて、電話の対話の中にあざやかに描き出される。
7	海市・福永武彦	倉橋由美子	偏愛文学館 （講談社） 初出は「群像」又は「楽」	2005/7	2p	小説の最後の文章は、最初の出会いを安見子から描いたもので、「その男」つまり「私」は死神のように見える。 「私」によれば人間は3種に分類できる。安見子は「いずれ（自分で）必ず死ぬ人間」とされ、小説を読んでいくうちに、完全な恋愛ができるのは、こうした「自殺の遺伝子」を持った女性だけではないかという気がする。ここでは男は芸術家という特別な存在であり、人間の女性がアポロンやエロスのような神を愛して死ぬという話と同工異曲かもしれない。 一人称で書かれた「私」と安見子の話が進行していくまわりに、「彼」と「彼女」が三人ずつ登場する断片が、時間の順序によらずに並べられていく。最後まで来た時、不意に目の前が開け、すべての断片が立ち上がって宙に並び、愛と死の物語全体が海上に浮かぶ都市となってその姿をあらわす。こうして蜃気楼見る瞬間の戦慄、それが恋愛小説「海市」のすべてである。
8	福永武彦論	西岡亜紀	福永武彦論 「純粋記憶」の生成とﾎﾟｰﾄﾞﾚｰﾙ	2008/10	2p 該当箇所	（結語より）福永の創作を貫いていた本質的な問題意識を「記憶」への関心であるとし、福永に特徴的な事項を二つ挙げている。 1．ほとんどすべての作品が、「記憶」の表象に向かっている。憑かれたように「記憶」を書いた小説家。 2．すでに過ぎ去った出来事を独立した物語として示すのではなく、作中人物の「過去」が「現在」の意識にどのように介入しているのかということ、いわば今まさに持続している「現在」の中に立ち現れてくる意識としての「記憶」というものを、福永は突き止めようとした。 結果として福永がその小説において追求しているのは、徹底的に自らの内的真実に忠実に「記憶」を定着するという態度である。ほぼ全小説において、小説の時間が物理的な流れに沿った線的なものとしては表象されずに、意識的に再構築されているのは、こうした意図からすると必然的な選択であったと言える。

3）文芸関連雑誌

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	現代では恋愛小説は可能か	佐々木基一	群像 （日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」（1978）に再録）	1968/3	2p （再録時）	この平凡陳腐な筋立ての中で、作者の試みようとしたものは何か。「私は自分に固有の色彩を、謂わば魂の色相とでも言うべきものを、作り出したいと望んでいた。従って私のえがく机と椅子は、その形態に於て現実離れをしているのと同様、その色彩に於ても私がそのように見る色彩によって塗られていた。背景の色彩も私の場合には常に重要であり、その人工的な空間が対象を生かしもし殺しもした。それは結局如何に構図を定め、如何に対象を布置するかという計算にも懸っていた。要するに私は定められた枠の中に、大袈裟に言えば私の小世界を築き上げようとしていたので、対象の種類は殆ど何でもいいのである。」 これは「間奏曲」という章で主人公の画家の宣告している言葉であるが、この画家の自作解説は、そのままこの小説にたいする作者の解説とうけとっていいだろう。またこんな告白の言葉もある。「私の方法が記憶術にある以上、私は安見子に関するあらゆる記憶をまざまざと覚えていたし、また彼女が不在であるために私の孤独は過去の光景をしきりと追想したから、そのためにごく小さな、それまで忘れていたような細部まで、はっきりと思い出すことが出来た。そして記憶はすべて制作を促し、モチイフは次々に生まれて、私に手を休めることを許さなかった。」 要するに、ある男とある人妻との恋のいきさつを客観的に描くことは少しも作者の意図のうちにはいっていないということであり、作者はむしろ、いわば非在を現実化することをめざしているということだろう。（中略） 恋愛小説は、非在の恋愛という形においてしか現代では書くことができない、という宿命をこの小説ははからずも私に確認させてくれた。そして非在の幻影において、作者は自らの、人間と芸術家という倫理的問題を検証しようとしている。
2	（対談）恋愛小説の可能性 －「海市」をめぐってー	小島信夫 佐々木基一	波　春季号 （日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」（1978）に再録）	1968/5	6p （再録時）	小島：イリュージョンであることを主人公（渋）自身も意識した恋愛。イリュージョンによって画家としての創造力の高揚、生命力をかきたてる。生身の女性との結びつきを実態的にもとめているのではない。海市（蜃気楼）という題が象徴的。 小島：一人称で書かれた内容が俗なのが疑問。 小島：愛についての談義がたくさんあるが、その愛の談義が作品全体の中で、十分保証されていない。この程度の終わらせ方では全体が締らない。 佐々木：平凡な日常生活のリアリティに夢としての愛が敗れたという通俗的な結果になっている。イリュージョンを押し進めて、現実の日常生活を超えた次元で書かれると現代においての愛の可能性の問題も出てくるのではないか。 佐々木：一人の人物を彼と私に分割して二重の視点とする「私」の相対化は現代的。そうした相対的視点からすべてを同じ現在として書いていく、それらをうまく溶け合わせると、かえって現代的なリアリティが出てくる気がする。そういう点ではじめのほうをおもしろく読んだ。 佐々木：主人公は安見子と恋愛することによってスランプから脱出するが、いかに脱出したかということがリアルな説得力を持って読者に迫ってくるというところまでは至っていない。
3	「海市」の用字法	守谷兎喜雄	国語の力　2	1968/6		資料なし
4	「海市」小論 生の記憶を担わぬ言葉	月村敏行	季刊芸術　1968年夏号 （「評論集　批評の原理」（国文社　昭 49・12）、及び日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」（1978）に再録）	1968/7	5p （再録時）	福永は言葉による自己開示という道よりも方法による自己開示という道をとっている。このために言葉は犠牲にされている。この方法意識によって根底としての言葉が犠牲にされざるを得ないという事態は現代的な過ちの徴候ではないか。
5	時をへだてた同じ夕焼け	長田弘	群像 （日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」（1978）に再録）	1969/8	2p （再録時）	福永の小説では夕焼けがオブセッシブなまでにその作品の決定的な時間としてあらわれる。「夕焼雲」（1954）、「飛ぶ男」（1959）、「海市」（1968）、「湖上」（1969）の例。登場人物たちは美しい夕焼けを見あげることではじめてここより美しい場所を夢み、その夢によっていっそうこの場所にふかくとらわれていくことになる。だからこそ、夕焼けはいつも同じ美しい夕焼けでなければならない。
6	「海市」の構成	湯川久光	国文学春秋 （日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」（1978）に再録）	1972/11	10p （再録時）	一見、混乱して見える「海市」の構成は、実際にはある整然とした構成を持っている。 「私」に視点を据えた節（a節）、「彼」に視点を据えた節（b節）、「彼女」に視点を据えた節（c節）、の配置構成による各章のパターンを詳細に分析し、その構成によってもたらされる効果について検討している。
7	海市	水谷昭夫	「國文學」特集・福永武彦 －現代小説の意識と方法 「福永武彦巡礼　風のゆくえ」（新教社出版、1989/3月）に再録	1972/11	6p	小説的現在とも言うべきものの終わる所から「海市」の時間が始められている。「草の花」の時の流れと同じ。「時間」は過去から現在を通じて未来へと流れていく枠組から解き放たれて、その内的に重層する光景を鮮やかに開示することを可能ならしめるものとなる。 戦争の悲惨さを、かくばかり甘美で輝きに満ちた光景の中で捉え得た作品は稀であろう。 形成された一つの主題、それが変形されて作品の新しい主題を生み、繰り返される。一つの主題、つまり「ふさちゃん」との愛を埋葬すること。それに共鳴し応答する弓子との愛の破綻があり、安見子との愛の試みがある。 菱沼に対して渋は「外部の要因は私が苦しまぎれに求めたものではなく、私の内部と一致し、私の成熟を促しているのだ」と反論している。安見子と渋の関係が、菱沼に対して主張したようなものなのかどうか、作品はそのように描かれているのかどうか。「海市」論の重要な課題の一つである。つまり主人公の、自らの内なるものへの戦いが、いわばこの作品の主題であることを示すものなのだ。 「物を徹底して見るということは、私に言わせれば幻覚を生ぜしめるものだ」（福永武彦「見る型と見ない型」文学界　1968年11月） この作品全体の中で問われているのは、かつて過酷な情況の中で、愛する女性を見捨てた主人公が、この自由な時代の中で、愛はつまり、幻なのか、ということなのである。 この作品のライト・モチーフというものを正確な意味で語り得るとすれば、その痛切な魂の希求、宗教的な深みにまでひびく愛の運命の物語だということになるだろう。
8	文学言語における虚偽	篠沢秀夫	初出「月刊言語」1973/10月 →「文体学原理」に付録として再録　1984/11月	1973/10	1p 言及個所	当時、靴下止めはまれであり、ガーターベルトが普通であったから、ひとりならずの女性読者からこの点につき指摘があったので、筆者は恩師のひとりである福永氏に面白半分に伝えて見た。"いいんだ、あれでいいんだ"と、身体的弱さや感性の哀しみを精神の強さでふっきろうとするような、この人特有の返事であった。原稿の段階で女性編集者から指摘されていたという。つまりこの作品の世界は何の断りもないから発表年代の昭和40年代初期と考えてよいと思われるのに、実際には作者の青年期である昭和10年代の光に満ちており、白い肌をさらす若い女性はおそらく昭和10年代後半のイメージである。そのことは、その女性のカッコ内での発言の言語的特徴からも特定できる。すくなくともこれは風俗小説ではないことが、この靴下留めの虚構への執着から推論できる。
9	福永武彦における恋愛	小佐井伸二	「解釈と鑑賞」 特集：憧憬の美学堀辰雄と福永武彦	1974/2	4p	渋の言葉「僕は愛されるのは嫌いだ。愛するだけでいいんです。（中略）僕が愛されている以上に僕のほうで愛していなければならない・・・」　恋愛におけるこのような姿勢は、福永のおそらくすべての人物たちに共通する。 福永の人物たちは、プラトンにならって、超越のひとつの可能性を恋愛に託している（もうひとつの可能性は芸術作品の創造行為）。愛するということはこの世界を超えようとする一つの意志であり、そのとき恋人は究極の美（あるいは、ある永遠なもの）に至るためのきざはしでしかない（ここに「饗宴」におけるディオティマの遠いこだまを聞く）。このような画家のエゴイズムが安見子を死に追い込んだのではないか。

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
10	海市	大河内昭爾	「解釈と鑑賞」 特集：憧憬の美学堀辰雄と福永武彦	1974/2	2p	「人は本当に誰かを愛することが出来るものだろうか」という作者の主題が安易なものとは思えない。この作品が通俗に堕さなかったのは、否、作者が外見の通俗さを恐れもせず避けもしなかったのは物語の孕む死の主題の重みをを信じていたからであろう。 渋の素直な情感と誠実な観念をもってしても、現実の裏切りという相克の重みを訴えるには、やはりこの物語は甘美に過ぎたというべきであろうか。 「物を徹底して見るということは、私に言わせれば幻覚を生ぜしめるものだ。」「或いは見られすぎた現実は、常に幻覚的なのである。」（「見る型と見ない型」/『枕頭の書』所収、1968･9）といった著者の言葉も思い出される。
11	福永武彦	柘植光彦	「解釈と鑑賞」臨増〈作家の性意識 →『現代文学試論』至文堂　昭53･5「福永武彦と“母”なるもの」	1974/11		
12	愛と死の幻像ー「海市」論	首藤基澄	「解釈と鑑賞」 福永武彦その主題と変奏 （「福永武彦･魂の音楽」 1996/8/10に再録）	1977/7	9p	きわめて技巧的な、方法に意を用いた作品であるが、「現代における愛の運命」を感得させるだけの世界構築に成功している。 愛の終りが一巡して愛の始まりを指示し、読者は愛の物語を再び所有することを強いられる。巧緻な、自然の時の流れに逆らう空間が実現している。 渋の感懐「人生というものはばらばらの挿入の集積」が、「海市」の世界にほかならず、そこでは自然な時間が分断されながら、現代人の内面の叫びを定着している。福永は「ばらばらの挿話」を、韻を踏むような形でさりげなくつないでおり、過去を有機的に組織している。 福永は非行動的な男にかかわっている。一切を擲って行動する者は、それほどうたを必要としないが、自意識を過剰に発達させた者は、過去を裁断できずに背負いこみ、呻吟しながらうたうことになる。福永は現実的な行動を捨象し、ひたすら内部世界にのめりこんでうたう男を造形している。安見子の行動に潔い現実感があるのに対し、渋に横溢しているのは愛への憧憬であり、行動に対しては鈍感で、現実への適応性を欠いている。渋は「愛は死を孕んだデカダンス」という認識に達している。 初々しく、慎ましく演じられる愛と死の夢、そしてやがてくる死からの遁走、そこに「海市」の主題、基本的なトーンがある。愛と死への耽溺ではなく、その機会を逸した者の愛惜と痛苦がライトモチーフになっている。 福永は現代の愛を「死を孕んだデカダンス」として甘美に定着した。モーツァルトの曲が「死に隣り合っている音楽」であったということに引きつけていえば、これは死に隣り合っている愛の見事な創造ということになる。「海市」は、いかに愛するかというモラルを追求したものではなく、日々進行する頽廃と疲弊の中で、死に隣り合った極限的な愛の幻像を追い求め、痛みの多い現代人のうたである。甘美な語り口で、猥雑な社会から離れながら、鋭角的に現代人の本質的な憧憬を抉りだしている。
13	永遠がついに彼を彼自身へと変えるがごとく	清水徹	群像　1979年10月号 （福永武彦追悼文）	1979/10	4p	「人生は本質的に悲劇であり、芸術はそのように人生を見る」と福永は考え、そこから福永作品世界をつらぬく主導調のひとつである＜暗黒意識＞の観念が形成された。見落としてならないのは、＜暗黒意識＞の観念が、＜闇に閉ざされた幼年＞あるいは＜母の喪失＞の主題とわかちがたく結びついていること。 原音楽的なものとしての＜母＞、不可視なものとしての＜母＞、闇としての＜母＞、言語によって表現されることを限りなく要請しながら、しかも言語表現から逃れ去るもの、― 言語活動をとおしてそれへの接近を限りなく意志しつづけることが福永の文学活動だった。 一方では闇としての＜母＞へのたえざる接近を意図し、他方では孤独、挫折、頽落、狂気を描きながら、なおたえず「人生は芸術に優先する」という態度をつらぬきつづけた。このぎりぎりの離れ業を支えていたものが、おそらく不可視のものとしての＜母＞であった。 どの小説においても男女の愛が描かれながら、それが地上的な意味ではつねに挫折に終わっていることには、深い意味がひそんでいる。福永の世界において、＜愛＞は孤独という人間のありようを確認して、なおそれを「或る永遠的なもの、或る純潔なもの、或る女性的なもの」へとつなげる至高の業であった。言いかえれば、「或る永遠的なもの、或る純潔なもの、或る女性的なもの」であるあの不可視な＜母＞と合一しようとする福永の根源的志向、彼の芸術意志であり、同時に魂の救いの希念でもある志向の、作品面上での現われが＜愛＞なのだ。 病いがしだいに重圧をまし、永遠的なものへの志向が宗教性を帯びていったのも納得がいく。
14	福永武彦と音楽	安川定男	解釈と鑑賞　47巻10号 特集：福永武彦	1982/9	6p	作者の言葉によれば＜バッハの「平均率クラヴィア曲集」に倣い、男と女との愛の「平均率」を「前奏曲」と「フーガ」とを交錯させる形式によって描き出そう＞と試みられている。このように特定の楽曲を直接的に利用するのではなく、本来は音楽に固有の構造形式を、小説の構造そのものに転移するすることにより、いわばモノディック（単旋律的）ならざるポリフォニック（他声的）な効果を、作品全体に響かせようと工夫したところに、福永の小説家としての類まれな特質があったのであり、この方法はもっと複雑化した形で「死の島」に継承、発展させられた。この方法が作者の所期どおりの効果を充分発揮しえたか否かについては多少の疑問が残るが、そのような困難な実験に挑戦した福永の創造的意欲とその成果に対しては高い評価が与えられてしかるべきと考える。
15	福永武彦の女性観	小久保実	解釈と鑑賞　47巻10号 特集：福永武彦	1982/9	5p	泉鏡花が書いた夢幻的な女を思わせる安見子は死の化身ではなかったか。かつて福永は、泉鏡花の夢幻の女たちは「決して実在することなく、ただ文字の上の幻にすぎないのに、読者は眼に見、耳に聴き、その吐息を感じ、恋着する」（「鏡花の美」）と書いた。もし福永の女ということをいうならば、それは安見子や萌木素子や相見綾子のように、自殺に赴く女であろう。彼女たちは一様にに精いっぱいに生きている。それだからこそ、生を侵す死に気づかずにはいられない。人は愛なくしては生きられないにしても、愛されることをきびしく拒否することもある。愛の不可能は、愛が死によって奪いとられるからである。
16	＜愛の三角形＞という隠蔽「風土」、「草の花」を中心とした福永武彦論	笠井潔	海燕 （「球体と亀裂」/情況出版、平成7に再録）	1986/10	28p （再録時）	福永の作品には反復して、「男ー女ー芸術」という＜愛の三角形＞が主題化されていると指摘したのは清水徹だったが、これはもっと一般的に、「私ー他者ー観念」の三項図式とも理解することができる。あるいは「内部ー外部ー観念」とも。 福永の文学の原点には、「音楽の与えるこの天上的な、夢幻的な情緒」という桂の言葉に示される、超越体験としての音楽体験がある。そして、この美的体験を、文学において再現しようという意欲が、福永の小説制作の根本的なモチーフであるということもできる。しかし、その点にのみ福永文学の主要モチーフを見るのは一面的というべきだろう。福永文学について清水徹は、「『ある永遠なもの、純潔なもの』の対部をなすものとして、かならず暗黒意識、挫折、死というモチーフがあり、その両者が隠れた対位法をなしている」と述べているが、妥当な指摘というべき。福永の観念批判は、「美ー愛」の超越体験と、「死ー悪」の外部体験の両極から、つねに立体的なものとして探求された。
17	「海市」 -- 閉じる円環	福田淳子	文藝空間　第10号 総特集＝福永武彦の「中期」	1996/8	1p	＜私＞を視点とし進行する現在の断章を、＜彼＞を主語とした渋の過去と＜彼女＞を主語とした安見子の過去の断章が追いかける構造を基本とする。過去の断章は時系列に沿っておらず、現在時が必要に応じた過去の時点を選ぶ形である。福永自身が＜フーガ＞と呼ぶものだが、第2部以降は構成がゆるやかになり、渋の妻、弓子を＜彼女＞とする断章も許されるようになる。こうした重ね合わせによって謂わば過去断章に追いかけられながら、現在断章は渋と安見子の関係、不倫関係と見えてその実すれ違うという愛の蜃気楼を語ってゆく。 最終断章において時間は出会いの時に戻り、視点人物を＜彼女＞を主語とする安見子に変えて冒頭の時間を今度は安見子からなぞることになる。これは＜彼女＞主語断章が＜私＞を主語とする現在に追いついたとも取れ、かくて小説時間は不規則ながら円環を閉じる。

4) 新聞、文庫/全集 解説他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	「海市」推薦文	川端康成	「海市」〔新潮社〕函刷り込み 「川端康成全集34」新潮社〔1982〕に再録	1968/1		純美明真の悲嘆と願望の貫流のようでいて、複雑微妙に、虚無、衰弱と救済、幸福、孤りと愛、生と死が組み重なって歌われている。そとめに一人称の「私」と三人称の「彼」との特異の使いよう、過去現在の時の特異の組み合わせなどに、いちじるしい試みがあって、音楽的な構成とも感じられる。私は二度読んで、二度目に見出したものも少なくなかった。
2	「海市」推薦文	伊藤整	「海市」〔新潮社〕函刷り込み	1968/1		「海市」は、自ら求めて触れ合った男への愛着が、この妖精のような人妻を狂わせて、死に追いやるまでの経過を、優しく、美しく描き出した小説である。
3	「海市」推薦文	平野謙	「海市」〔新潮社〕函刷り込み	1968/1		資料未
4	「海市」書評	遠藤周作	東京新聞　夕刊 （日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」(1978) に再録）	1968/1	ｺﾗﾑ	福永の作中人物はすべて死という種が心の中に巣くっていて、その行動はこの種が少しづつ大きくなることを暗示しているようだが、この作品は、さらにはっきりそれを感じさせる。　（中略） 福永はこの小説の構成をバッハの「平均律クラヴィア曲集」に倣ったとのことだが、我々はむしろ作中に主人公たちが耳にするモーツァルトの一曲の描写がそのままあてはまるように思われる。 「この曲は古典的な緊密さの中に一種ロマンティックな哀愁を含んだものと言われているが」と主人公の男は言う。「私はここにも一種のデカダンスの匂を嗅ぎつけていた。それは死に隣り合って、冥府から吹いてくる風に身を任せている感じだった。」 モーツァルトの曲にたいするこの主人公のことばはそのまま簡潔に「海市」にあてはまるのである。
4-2	「海市」書評	小島信夫	朝日新聞　1968/1/29	1968/1	ｺﾗﾑ	私は渋太吉のいいよる無邪気さに閉口しながらも、ついひきずられて読み、確かにたえずフーガの役をする断章に心を誘われ、最後に何か音楽が鳴りひびく中を読了し、さすがは、と敬意を表することにした。ところが30分ぐらいたつと、ちょっと印象がうすれはじめた。いや、文学的すぎたせいか。あるいは音楽的すぎたせいか。作者の渋太吉のつかまえ方のアイマイなせいだろうか。
4-3	「海市」書評	不明	朝日新聞　1968/2/6	1968/2	ｺﾗﾑ	愛の情熱は蜃気楼のように、束の間の幻影だと作者はいうのだろうか。いや、断じてそうではな。愛こそは死に呪われた人間が死から最も美しいものを奪い取るときの至福の心の状態だと作者は主人公に託してはっきり語っているし、この小説がみごとに実現してみせた陶酔的な愛の世界はこのことを証して余りあるだろう。 ただ欲を言えば、作者の唯美的な心情から生まれ育った愛の情念が、はたして天上を目指しているのか、あるいは依然として地上にとどまっているのかという点をさらに一歩踏み込んで探求して欲しかった。
5	「海市」書評	中田耕治	北海道新聞 （日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」(1978) に再録）	1968/2	ｺﾗﾑ	単純な恋愛を複雑な構成によってとらえ、現代人の内面にひそむ暗い情念の所在をさぐろうとした作品。 ただの芸術家の情事とその終わりを描いたのではなく、恋愛の反結晶作用ともいうべきものを描こうとしている。つまり不倫のにおいを意識的に避けている。 過去、現在が並列されていることが、作品の主題の対位法と必然的に結びついている。 反ロマネスクな性格をもった芸術家小説として読む必要がある。
6	「海市」書評	安部公房	サンケイ新聞 （日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」(1978) に再録）	1968/2	ｺﾗﾑ	恋愛小説の形を借りた、恋愛不可能小説。人間の情念の同調不可能性を、映画のモンタージュ似た手法で展開。本来ならば、一つの時間の流れに沿った物語になるべきはずの出来事を、情念の形式によって分類しなおし、並べかえたようなもの。手法とテーマの一致という点では見事な成功作。 結末の処理に疑問。せっかく登場人物の各人に、異なった速度で動き、異なった時をさしている、ばらばらの時計を持たせてやったのに、なぜ最後でそれらの時計を修正し、同調させてやる必要があったのか。悲劇的効果をあげるためには、それも一つの手口には違いないが、この作品の主題は、単なる宿命劇ではなかったはず。 この作品だけに固有な、生き物のように動く時間の発見が素晴らしい。
7	「海市」書評	進藤純孝	週間読書人 （日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」(1978) に再録）	1968/2	ｺﾗﾑ	意図するところは、熱していく愛の物語と、冷やかな生と死の観照をより合わせながら、「人は本当に誰かを愛することが出来るものだろうか？」と問うことに違いない。安見子の「あたしたちは別々に愛していたんです」が、現代人の悲劇として用意した作者の回答だろう。
8	「海市」書評	森川達也	図書新聞 （日本文学研究資料叢書「大岡昇平・福永武彦」(1978) に再録）	1968/2	ｺﾗﾑ	巧緻を極めた技法上の工夫にもかかわらず＜現代における愛の運命を追求する＞という主題の思想的内実は、全く通俗そのものであり、何一つ深まりも見せてはくれなかったが、この作品が一つの完結した濃密な小説空間を実現し得て、純粋な芸術的カタルシスをもたらしてくれるのは事実。
9	「海市・忘却の河・草の花・廃市」解説	辻　邦生	新潮日本文学４９　福永武彦集	1970/8	12p	愛の観念を発達させ、男にとって女が、女にとって男が、人生そのものを覆いつくすものと感じられるようになったのは西洋文明の特質であるという意味のことを、吉田健一が書いているが、この意味では、福永の作品は、深く日本の現実に根ざしながらも、その資質と姿勢において、きわめて西欧的であるということができる。 福永が愛の問題をとりあげる場合、それは生の根源にあって、人間の生死を支配する絶対的な価値として問われるのである。愛はつねに生存理由の問いかけとして、前面に立ちはだかるのである。 愛の不可能は、渋が肺病の少女と心中する約束を守らなかったという原罪からまず生れている。彼は愛の不可能を受けいれることによって、生に戻ってくるのである。渋にとって生きるとは「愛し得ぬこと」にほかならない。しかし彼は「愛せざるを得ない」のである。 福永が「海市」において執拗に愛欲場面を描くのは、愛の肉体的な結びつきが深まれば深まるほど、それが不可能であることを露呈させる為である。 「愛さないではいられぬこと」は「愛し得ないこと」の前で罰せられるほかないのである。しかしまさにそれゆえにこそ、こうして愛を試みた安見子の、どこか中天に消えてゆく姿には、ギリシア悲劇的な清浄感が漂うのである。 現在、ほとんどの文学が愛の不在の上に平然と立ち、それを危惧するでもなく、その現象を安易に追うとき、愛の根源を執拗に問う福永の文学が、私たちに人間の領域の確認を迫るのはけだし理由のあることに思われる。

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
10	海と鏡と	清水徹	現代の文学7　福永武彦（講談社）「鏡とエロスと ― 同時代文学論」(1984)に再録	1972/1	20p	福永の作品において、＜海＞はまず、愛の沈むところ、愛するものが、自分を愛して〈れたひとが身を沈めた深淵なのである。 福永の作品群をつらぬ〈ある悲劇的な愛の構図がある。内部に＜海＞の虚無を所有する男女がたがいに向き合うとき、彼らはたがいにたがいの鏡となり、そしてその相似と差異の、同一と他の微妙なずれから、ふたりのあいだに悲劇的な愛が生まれるという構図である。 ＜海という鏡＞の主題のひとつの展開が「海市」に見られる。かぎりない疲労感に浸されている40歳の画家、渋は安見子と愛し合う。安見子は「子供のころから、しょっちゅう自分のお葬式の夢を見る」ような女性であり、大学時代の先生と結婚したのも、ただ自分の暗黒意識を飼いならすためにほかならなかった。彼女は渋と出逢ったとき、彼が「自分と一緒に泯びて」〈れるかもしれぬと直感して、す〈な〈とも彼の内部の虚無を見抜いて、彼を愛したのだ。ここでもまた「鏡と鏡の向かいあい」という愛。だが渋のほうでは、もしかしたら安見子によって虚無から抜けだせるかもしれぬとひそかに期待して彼女を愛したのであり、ふたりの愛の姿のこの微妙な差異が悲劇をもたらす。ふたりの間には乗り越えられぬ海が介在し、―　というか、ふたりは並んだまま＜海＞を見つめる。＜海＞の彼方にふたりが見たかもしれぬ蜃気楼＝「海市」＝「妣の国」も、その姿を異にしている。最後に安見子は「妣の国」を遠望したかもしれぬ伊豆の海に身を投じる。
11	「忘却の河・海市」解説	加賀乙彦	新潮現代文学31　福永武彦集	1980/1	7p	「死の島」の相馬の言葉「作者と読者との共同作業で、小説が読まれるようにすることが作者の任務」は、福永の文学観を端的に示しており、彼のどの小説においても一貫して達成が心掛けられている。「海市」では、「彼」と「彼女」が誰であるかを作者は明かさず読者の想像にゆだね、読者は作品の完成に参加することになる。 「忘却の河」の主人公にみられた"情死しようとした女"の過去は、「海市」の主人公にもある。それは卑怯者の意識である。この意識は一直線のひたむきな愛を、じりじりと圧殺しようとする。卑怯者の意識は、また戦争によって死んだ者への罪の意識に照応していく。 中年男と人妻との恋というありきたりの材料を使い、粘りのある奥深い物語を創りえた秘訣は、三重の時間（現在、近い過去、遠い過去）を見事に表した手法にある。 福永の文章が、秘密や無意識や暗黒意識までを描きうるのは、その手法のせいである。彼は意識を交錯させ、視点を変え、一人称を三人称にずらしていく。この場合、重要なのは一つの章または節が、映画では一般的なモンタージュのやりかたで接合されていることだ。
12	「海市」文庫版　解説	豊崎光一	新潮文庫「海市」（新潮社）	1981/9	7p	3人の「彼」、3人の「彼女」。3者が「彼」あるいは「彼女」であるかぎりにおいて重なり合い、類似し、ある場合においてほとんど同一であるという側面が立ち現れて〈る。異なる「彼」ないし「彼女」の相似的な行動、シチュエーションが、たびたび意図的に並列されていることもこの印象を強める。 3人の彼女の相互浸透、一種の同一性は名においても現れている。YASUMIKOの中にはYUMIKOが含まれ、残るAとSはFUSAの一部分を成している。→「反復」の一語に集約（キルケゴール、フロイト、ドゥルーズに言及）。 見ること、見ることによって対象を所有つ〈す画家の眼が男のものであるとき、〈まな〈見られているのを意識することによって十全に自己となる女の肉体が、芸術の上でも人生においてもその対重として存在しなければならなかった。 「海市」、「死の島」のヒロインたちは、生においても死においても男たちよりも果敢であり、そのことによっていっそう哀切である。彼女らが作者の魂を分け持つ度合いは男性の主人公に決して劣らない。 「海」にも反復の契機を見てとることができる。ポーの詩「海の都市」、「死都ブリュージュ」、「廃市」への言及。
13	教師と作家の二重性	平岡篤頼	福永武彦全集代9巻月報	1988/6	3p	「われわれの生を虚無に返し、われわれの生を虚無から回復する美」（「海市」より） 「海市」の中の人物は、渋にしろ弓子にしろ、安見子にしろ、みんな死に取り憑かれている。彼らにとっては、生のはてに死が訪れるのではな〈て、死が先にあって、そのうえに生がやっとのことで営まれる。 愛せないという絶望が愛と重なり、作品全体としても、終わりが始まりと重なるというこの根源的な二重性が、やがて「死の島」でさしもの芸術信仰をも越えてしまう。

5）大学研究紀要、その他研究録

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	福永武彦における愛の不可能性と可能性	堀内昭岐	国文白百合　14	1978/12	8p	愛の不可能性を描いた作品の一つとして「海市」を取り上げ、検討している。 二度までも裏切らねばならなかった渋だが、彼には没我になれない悲哀がある。近代人の身勝手なエゴイズムと解釈できないわけではないが、他者への愛よりも常に増大した自己をめぐる観念を持つ者の「愛の不可能性」が巧みに描かれていると思われる。「風土」、「草の花」、「心の中を流れる河」、「海市」の4作品の中心人物の愛について、福永が彼らに残したものは暗い愛のない孤独感であった。ある者は愛から孤独へ、ある者は孤独から抜け出し愛へ向い、また孤独へと戻り、孤独という状況から一貫した「愛の不可能性」を示し続けていると思われる。
2	福永武彦「海市」論	中条宏	関西学院大学 日本文芸研究　33―14	1981/11	11p	安見子と、掘辰雄の「菜穂子」は、「現代」の中に在って、死すべき「運命の曲線」を背負わざるを得ない一典型であるとし、そして生き残る存在となり日常に回帰する渋は、安見子の「死すべき運命」の何であるかを知りえない人間であるとしている。 （引用）ここで作者が開示するのは、「現代」に於いて、「現実」に懊悩しながら、「幻影」と「日常」の狭間に生きることを余儀なくされた人間の実相である。さらに死を賭して愛そうと試みた安見子に関しては、「幻影」としてではなく我々は果して愛し合えるだろうか、という普遍的な問いかけなのである。作品「海市」は、「幻影」としての「海市」の中に、愛と死の間に介在するものとして「現代」を浮上させたといえよう。そして、こうした「現代」に在って、真に愛することへの希求は、福永の文芸世界の特長として、一貫して語られるのである。
3	福永武彦研究 ーモチーフからみた「海」	山本由美子	国文学報　24	1981/3	4p	福永の小説から「海」を表現した言葉を抽出した。その結果、小説中にみられた「海」とは、「生きる場所」、「死の仮装」、「人間の鏡」、「孤独」、「絶望」、「記憶」、「ふるさと」、「虚無」、「混沌」、「永遠の標本」、「音楽」であった。 福永は、「海」の彼方に、「ふるさと」（「妣の国」）を想い、亡き母（「妣」）を想い、それと同時に「妣」の帰っていった世界、人間の短い生命が生まれては死んで帰ってゆく、「虚無」の世界を思い浮かべたのであろう。
4	福永文学の音楽性と「海市」	矢野昌邦	論究　5	1983/7	10p	福永文学に音楽性が感得できるとすれば、その文学が内包している音楽と読者の「内なる音楽」との共鳴を示していると考えられる。文学の音楽性とは、人が音楽を聴いた時にもつ感動と均質な心の在り様という意味とその内実がもたらす形式という意味で理解したい。福永にとって「内なる音楽」（現音楽）とは「純粋記憶」と均質なものと推測され得る。 「海市」において、まず前奏曲が「私」という渋の視点で抽出され、フーガが「彼」（渋の過去の客観的視点）で、また「彼女」（主として安見子の過去の客観的視点）で描写され、しかもこの三者が微妙に照応しつつ小説が造形されている。さらにこの小説は、第1部、第2部、間奏曲、第3部という構成になっているが、これは福永自身が指摘しているように、ブラームスの「弦楽六重奏曲」第1番の形式にもなっている。 福永は「海市」において、音楽的主題を音楽的方法で抽出しようとしたのであり、この意味でこの作品は福永の長編小説の音楽性志向の極北となるものである。しかし福永の企画した効果は必ずしも充分にはあがっていないと考えられる。
5	福永文学の「暗黒意識」	矢野昌邦	論究　7	1984	9p	暗黒意識は福永の生と文学の推移に深く関わっている。福永文学は、その暗黒意識を他の作家よりも一層内在化し、意識化し、それを生の根源にまで突きつめようとした点に、その特性のひとつがある。 「海市」では、主人公の画家が若い人妻との関わりの中で、次第に罪の意識を感得し、暗黒意識におちいる過程が描かれている。その罪の意識は、彼が約束を破って一緒に死ぬことができなかった恋人への罪に端を発し、最後に人妻との約束の場所に行けなかったことへの罪へと帰結していく。彼は「暗黒そのものの奈落の色が、深い静けさを以って、私の周囲に霧のように立ちこめた」のを感じる。この作品は音楽性への志向に重点が置かれているが、「愛の運命」の追求に、罪の意識、暗黒意識を交錯させて抽出されたものと言える。
6	「海市」論	中村洋子	活水日文　12	1985/3	6p	愛が究極的に互いの存在を、つまりは＜死＞を要求し合うところまで高められたとき、その極限において、一つの選択を迫られる。自己と他者との選択である。それはある意味において傲慢な行為であるが、＜愛＞はこのような卑劣や傲慢さえも呼びこんでいくものなのである。渋は、その極限において自己の限界を知り、他者を切り捨て、自己の内部へと帰巣していかざるを得ない。そしてその選択は、再び現代の虚無と頽廃の中に彼の魂を漂泊させる。彼はその絶望的悲しみの中にあって尚、愛を憧憬し、見つめていくしかないのである。
7	福永武彦における絵画の位置	矢野昌邦	論究　8	1985/12	9p	福永は「詩の中に私が表現した『ある微妙なもの』を小説という形式で表現」（文学界　1963/6）しようとした。「ある微妙なもの」とは結局「文体」であり、それはボードレールの詩を福永が解釈した「原音楽的なもの」である。 福永文学に抽出される愛、死、孤独といった主題群も根源的にはこの「微妙なもの」から生起するのであり、ボードレールの「原音楽的なもの」が福永文学の内奥に位置していると考えられる。 福永は自己の小説を、「暗示」し、読者の想像力に訴える方向に造り、そのための技法のひとつとして、音楽、絵画を導入している。絵画、とくに具現化された絵画の採用は、彼の小説の中ではイメージを喚起しつつも「象徴詩」の特性の強調といった役割を果しているのではないか。
8	安見子という女 - 「海市」へのひとつの読み	高橋重美	立教大学日本文学　61	1988/12	9p	・渋はいつでも自分の愛を女に押しつけている。ふさには信念としての愛を、弓子には救済としての愛を、そして安見子に対しても、渋の愛し方が一方的なことに変わりはない。 ・渋の固定観念が心中失敗の「死に損ない」であるならば、安見子のそれは「愛を知らない」であろう。安見子は渋のように愛を盲信しない。むしろ愛を疑い、否定的に見ようとしている。 ・安見子の中の「暗くて破滅的なもの」は「みんな無駄」という認識（小学生の時の猫のエピソード）による虚無感によっている。 ・渋と安見子は生に対する虚無感と愛に対する不安という点で一致している。安見子が渋に惹かれたのも、渋の絵に自分と共通する「破壊的なもの、不吉なもの、人を闇の方へ振り返らせる奇妙な呼び掛け」を感じたからである。 ・常に行為していながらそれを「愛」と呼べない安見子。福永自身で「頽廃と絶望の時代に愛とても例外というわけにはいかない。にも拘らず愛は我々の心の底に、常にクラヴィアの如く鳴り響いている筈である」と解説しているが、この「頽廃と絶望」は安見子にこそ表されている。 ・少なくとも安見子を受身的存在から渋と等価値にまで引き上げなければ「海市」の小説技法は生きてこないのではないか。
9	福永武彦研究 - 愛の不在のふるさと	細川七生子	白門国文　7	1988/3	5p	主として「草の花」、「海市」、「忘却の河」における「愛したいのに愛し得ない」ために苦悩する人物を中心に、愛の不在の軌跡を、福永の「ふるさと」に関連づけながら検討している。 「草の花」を「愛し得ない」ことを発見する作品とするなら、「海市」は「愛し得なく」なっていく過程を追及した作品、また「忘却の河」は「愛し得なくなった」罪をどう背負っていくのか、どう生きていくのかを示唆する作品ということができる。
10	「海市」の方法 一人称と三人称についての一考察	和田千草	旭川国文　7	1991/3	12p	海市の構成は、渋の視点から一人称で語られる部分（前奏曲）と、「彼」「彼女」が登場する断章群（フーガ）から成る。 福永の言葉によれば、3人称の断章を織り混ぜた意図は、ひとつには各々の断章で「さまざまの人間関係」を描き、それらが「お互いに響き合う」ことをねらったものであり、またそれらを積み重ねることによって読者に「普遍的な人生の姿を垣間見」させることにあった。一人称は、作品の冒頭から結末までを貫く部分を用意して長篇として成り立たせようとした。 「海市」のエピグラムの詩は、人間はすべての事物を幻影としてしかとらえることができないということを意味していると考えられ、「海市」の主題と深いかかわりがある。 渋にとって安見子は、自分を「衰弱」から回復させ、芸術と人生とに「生の息吹」を吹き込んでくれる人物であり、それ以上でもそれ以下でもない。換言すれば、渋の安見子に対する視線や愛し方は、彼自身が自らを支えていくためのものでしかない。渋は安見子を愛したが、それは彼が自ら生み出した「幻」を愛することに他ならなかった。人間は目に映るもすべてのものを幻影としかとらえることができない。それは愛し合っているはずの者どうしの間でも変わらない。それが「海市」で描き出された「平均率」の意味である。

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
11	『海市』の構成とテーマ	五明美保	愛知教育大学大学院国語研究　1	1993/3	15p	「音楽的な」小説という観点から、平均率クラヴィア曲集の構造と「海市」との構成の比較検討を行い、さらに渋と安見子の愛と死を分析している。 （引用）「人間の生の本質を示す」記憶を思い出すというテーマ、「普遍的な人生のすがたを垣間見る」というテーマは、構成によって示されている。 「海市」の「音楽性」とは、記憶を「思い出す」作用が心の中に繰り広げられることである。その作用は、「謎」を解こうとすること、「人間の生の本質」となる記憶を辿ることである。記憶を呼び戻そうとする行為は渋だけに与えられたものでなく、読者にとっても、過去が客観的に描かれることで、自由に過去の中に「人間の生の本質」を探ることが与えられている。そして読者が「海市」を読み進めていく中で、記憶の中の「重要な運命の一環」を発見することが、作中人物の「運命」を発見することであり、同時に作中人物の記憶の「無意識」部分を「意識」化することである。この「無意識」の「意識」化における、現在と過去を行き来する心の動きこそ読者が作中人物の「内面的時間」を追体験することであり、「人間の魂の中の和弦のようなもの」を追うことである。そして読者が、自分の心が過去と現在を行き来して、「運命の一環」を発見していることを自覚しながら、渋の内部、安見子の内部でどのように過去と現在が交錯していたか、どのように自分の「運命の一環」を発見していったかを考えるとき、作中人物が持つ「時間」と、読者が発見する「時間」とによって小説の「時間」は拡大し「別個の次元、作者の意識を持つ超時間的体験を感ぜしめる。」（「二十世紀小説論」）であろう。
12	福永武彦『海市』論 ―その音楽性の内実―	倉西聡	蔵庫川国文　45	1995/3	12p	福永は初版函のメッセージで形式面での音楽性に言及しているが、それはこのメッセージを読んだ読者がその音楽性に留意することによって、小説の形式の中から「確かにそれと知り得ないような一種の感じ」を感得して、福永自身の「原音楽的なもの」に近づくように目論まれたものだといえる。 福永の言う音楽性という観点から考察した場合、「断章がお互いに響き合うような」音楽的効果が希薄であり、その意味で作者の意図が達成されたとは言いがたい。しかし、第1部ではフーガの断章どおしの対応が巧妙に計算され、音楽的効果を高めている。 「海市」を一人の画家の精神的衰弱からの回復の物語として読み取るならば、第1部のみで充分完結しているといえる。 恋愛小説としてよりも、福永流の象徴主義理論に基づいた芸術家小説として読むほうが、その音楽性を評価する上でも、より適切であると思われる。
13	福永武彦『海市』研究ノート ― 章立ての改稿をめぐって―」	高木徹	中部大学人文学部研究論集 第5号	2001/1	14p	福永がどのように『バッハの平均率クラヴィア曲集に倣った』のか、章立ての観点から考察している。間奏曲全体を一つの章と考えるならば、単行本「海市」は23章からなり、それが「全小説」では25章となる。平均律曲集は第1巻、2巻それぞれ24の前奏曲とフーガから構成されている点から考えて不自然である。間奏曲を除外して24章と考えるべきか。改稿の意図は判然としない。 24という数については、ヴァレリーの「海辺の墓地」が24詩節からなり、循環的構造という点でも「海市」に通じるものがある。また「愛の試み」の挿話を除いたエッセイの部分が24に分かれている。
14	福永武彦『海市』 ―構造と語り―	西田一豊	日本近代文学　第72集	2005/5	13p	「海市」全体が渋によるモノローグであり、自らの過去の姿である「彼」の章群はもちろんのこと、安見子に視点が合わされていると考えられる「彼女」の章群も渋による語りであるとし、「海市」の語りの方法からテクストの構造と主題を検討している。また、他者の「あり得べき」挿話まで語ろうとする渋の方法が、それゆえに独善的になること、また安見子の他者性を消すことに機能していると述べている。「海市」とは蜃気楼、つまりは「安見子」のことに他ならず、つかまえることのできない他者をめぐる物語であると言ってよいだろう。安見子に天女のイメージを重ね合わせたとする視点も興味深い。
15	「海市」（福永武彦）論―裏切りの構図	栗山嘉章	長野県国語国文学会研究紀要 第6号	2005/11	6p	湯川氏による「海市」の構成の検討（文献3-6）は単行本を定本としているが、全集本では章立てに変更があり、単行本の23章構成に対して全集は25章構成となっている点などを指摘している。 「裏切の哲学」（1997）/若森栄樹を手がかりに渋の裏切りについて考察している。若森は「裏切は回帰する」と言う。福永の小説の主人公が裏切を重ねることは本当の姿の開示であり、自己を自己足らしめる為といえるだろう。ふさちゃんへの裏切が渋の本来の姿であるように、安見子への裏切も渋の本来の姿といえる。裏切は回帰することによって、渋は渋の存在となっている。
16	福永文学の新しい可能性をめぐって （没後30年記念シンポジウム 2009/12/12）	菅野昭正・ 清水徹・ 山田兼士 対談	年報　福永武彦の世界　第1号	2010/3	22p	（菅野　基調報告）「妣の国」まで/「妣の国」から 「生は暗く、死もまた暗い」というテーゼで書いてきた福永の小説が「忘却の河」あたりから、一種の補色として「妣の国」という観念を中心に、「人間は死んでも帰っていく場所があるのではないか」という考えに重点を置いて、小説を書くようになったのではないか。福永の小説には北方志向、南方志向と両方あって、「海市」の安見子は南の海（伊豆）へ行く。「忘却の河」の後に書いた「海市」で、自殺者であるにもかかわらず、南の海を目の前に死ぬ設定にしたというところに、ある種の啓示といったものが見えるようだ。こうして、「妣の国」の観念を導入することによって、福永の小説の世界に、ある別の色彩が加わり、後期の作品においては、それが大事な焦点になっているのではないか。 （討議） 清水：「海市」も同様に海と死が結びついている。安見子は初めて渋と出会ったときに、自分と一緒に死んでくれるかも知れないと直感する。つまり、そのとき渋の内部に虚無を見抜いた。渋のほうは、安見子を愛することによって、自分の中の、自身を苦しめている虚無から抜け出せるかもしれないという期待をずっと抱きながら安見子を愛していた。このように、安見子と渋の関係は、死をめぐって非常に不思議な構造を持っている。安見子は渋とつきあっていくうちに、次第次第に彼女の内部の死が大きくなっていき、おそらく二人が最初に出会った伊豆の半島で身を投じてしまう。二人で並んで伊豆の海で見たもの、伊豆の海というのは本来は明るい海なのだけれど、それが彼方にある「黝ずんだ海」、「妣の国」であり、それは「海市」つまり蜃気楼を見ていたんだというのが、二人にとって、すくなくとも安見子にとっての「海市」というタイトルの、本当の意味なのではないか。つまり「海市」は一種の「廃市」なのだ。 菅野：「海市」に出てくる一節で、自分達と同年代の人間はたくさん戦争の犠牲になって死んでいると、その死者に対する一種の、生き残ったという罪障感のようなものが自分にはあるということを、渋に言わせている。同じようなことが、「忘却の河」の主人公にもあるし、そういう意味で福永の戦争体験は、同世代の人々に対する贖罪意識に結びついている面が多分にあるのではないか。 山田：渋の戦中世代についての議論がある。要するに自分は死にそこなった人間だと。死に向かう人間と、死にそこなった人間と、死に無関心な人間、この三種類しか人間にはないのだと渋は言う。自分は死にそこなった人間だから、死者に対してどうしようもない負い目がある、だからいずれ死を選ぶしかない、という考え方だ。それが一種のニヒリズムとなって恐怖の中に沈んで行くようなところ・・・・・・死者の眼差しというものは、そういうところから出てきていると思う。
17	福永武彦『海市』論 ―実験小説による意識化された多義性―	稲垣裕子	阪神近代文学研究　第11号	2010/5	15p	フランスの現代文学作家、ロブ・グリエの「嫉妬」を参照しつつ、語り手と語りの観点から「海市」における実験小説（ヌーヴォーロマン）の試みを考察している。「嫉妬」における話者（夫）の視線は過去と現在を自由に往還し、彼にとっての現在もしくは回想を語り続けるための装置として存在している。それは「海市」における渋の語りの特徴や方法と類似している。 「二十世紀小説論」からは小説構造を実験的に捉え、読者の参加を要請する福永の意識が窺える。福永は日本におけるヌーヴォーロマンの追究を「海市」で試みたのではないか。「海市」は読者に多義的な読みを許容し、それに呼びかけることで、読者とともに自己の内的世界に問いかける小説であった。多義的な読みの一つの可能性として「海市」全体が渋ひとりの独白とも読める余地を残す手法を福永は採用している（5-14と関連）。 また、「海市」の断章における「彼」「彼女」の特定についての湯川氏、栗山氏の先行論文（3-6、5-15）の解釈との見解の相違を論じている他、安見子の名前、西田氏の指摘する安見子の天女イメージ（5-14）についても検討を加えている。